延岡市文化財調査報告書 Ⅰ

1．延岡市石田組合せ式石棺調査報告

2．市道、下舞野線拡幅改良工事に併う
南方第19号古墳の墳丘原形確認調査報告

1981．3

延岡市教育委員会

例　言

1. この報告書は、延岡市教育委員会が実施した文化財の緊急発掘調査報告書である。

2. 掲載しているのは　昭和５３年度、５４年度に調査したもののうち、石田町出土の石棺および南方－１９号墳の原形確認調査の２件である。

3. 本文の執筆にはその調査にあたった調査員、石田町出土石棺については、石川恒太郎〔宮崎県文化財保護審議会委員〕南方１９号墳については茂山護〔宮崎県総合博物館主任主事〕があたった。

4. 調査の計画には、市教育委員会社会教育課　課長補佐　井上武衛
同文化財担当　渡辺博史（５４年度）牧野義英（５３年度）があたり、宮崎県文化財保護指導員　甲斐常美氏の助力を得た。

5. 本書における遺物は、延岡市教育委員会が保管している。

目　　次

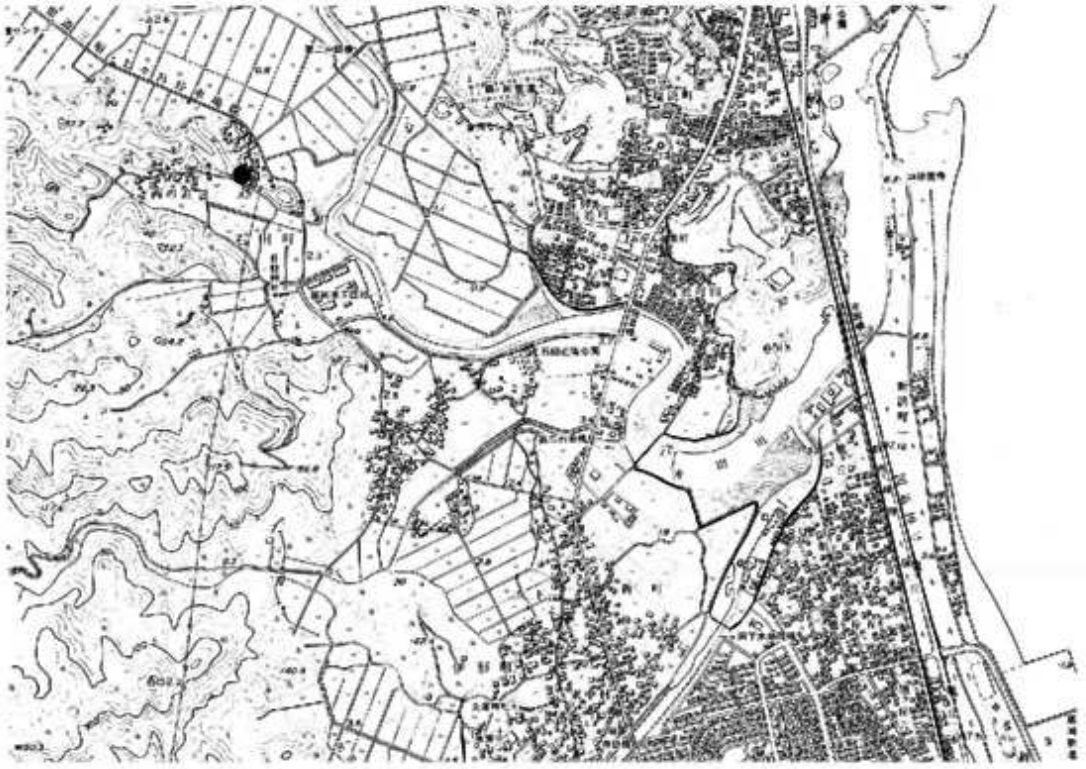
延岡市石田組合せ式石棺調査報告

1. 発見の動機 …… 4
2. 過去の発見記録 …… 4
3. 調査の結果 …… 5
4. 発掘した遺物 …… 6
5. 遺跡の年代と特徴 …… 7
6. 挿図 …… 9
7. 図版 …… 11

南方第１９号古墳の墳丘原形確認調査報告書

1. はじめに …… 14
2. 古墳の現状 …… 15
3. 調査の経過 …… 16
4. 各トレンチの所見 …… 18
5. 総括 …… 20
6. 挿図 …… 23
7. 図版 …… 30

延岡市石田組合せ式石棺調査報告



石　川　恒太郎

延岡市石田組合せ式石棺調査報告

石　川　恒太郎

1. 発見の動機

昭和 53 年 8 月 20 日延岡市石田町西の迫の通称鶴山（標高 40 m）の山頂で、同地の所有者農業佐藤伝氏が宅地を埋立てる土を取るため、同山頂の雑木林をブルドーザーで押したところが、蓋石に当って発見された。それで市の教育委員会から、工事を停止させ県教育委員会に連絡してきた。
それで筆者が委嘱され同 22 日出張して調査した。

2. 過去の発見記録

この古墳を調査したときは、従来この場所で石棺が発見されたことを知らなかったので、これがここの最初の発見と思っていた。ところが後で古記録を調査したところが、大正時代に既に 1 基発見された記録があった。それは当時旧延岡藩主内藤家（現内藤記念館の場所）にあった藩史編纂所に勤めていた郷土史家の山室元吉の大正五年八月三十日付の「古墳調査報告書」にあるもので、内容は次の通り。

「〇伊形ノ石棺

沖田川ヲ南ニ望メバ丘陵ノ起伏シタル西ノ迫ト云ヘル所アリ、其所ヨリ生年石櫃ヲ発見シタルニ中ハ総体朱詰トナリテ刀剣等入レアリシト、恐ラクハ小野附近ニアル石棺ノ同一種ナラン、時間ノ都合アリテ踏査セズ。」

とあるのがこれで、時間の都合で踏査しなかったのは甚だ遺憾であるが、「中ハ総体朱詰トナリテ刀剣等入レアリシト」とあることなどから考えると、今回のものと似たものであったと思われる。

3. 調査の結果

石棺が存在したのは前に記したごとく、標高 40 mの丘頂部であるが、延岡市内におけるこのような丘頂には箱式石棺や組合せ石棺などが数多く営まれている所が多い。例えば、先年県教委で調査した樫山をはじめ友内山や現在市営公園墓地、下平原などがそれであるが、これらの丘頂に棺を葬っているのは、被葬者の霊が高天原（たかまがはら）に昇ることを願望しているのであろうと推測される。

石棺はやや軟質の凝灰岩で作られており、ほぼ東西に方位していたが、正しくは東西より20°南に傾いていた。棺はブルドーザーのため西端部が破壊され、西の側石も動いていたが、棺は東西の長さ 150 cm、南北の幅 50 cmに造られていたものと考えられる。

蓋石は巨大な1枚石で、長さ 153 cm、幅 80 cm、厚さ 13 cmで、内側は平坦で外側はやや盛り上っていたが、西側の両端が少し欠けているのはブルドーザーのためであろうか。

棺の身は、東西の両側面は1枚石より成り南北の両側面は3枚ぐらいの石が並べられていたと思われるが、西部が破壊されているので明らかでない。しかし残っていた南側の石の大きさは長さ 60 cm、厚さ 7 cm、幅 50 cm、北側のものは長さ 83 cm

厚さ8㎝、幅50㎝であった。珍しいのは東西の両側石で、南北の側石が倒れるのを防ぐためであろう、両石とも長さ65㎝厚さ7㎝、高さ50㎝、（西側のものは壊れていたが）で両端がコの字形に20㎝内外曲って作られていたが、このような構造の石棺の出土は県下で最初のことであり、県外でも余り例のないことではなかろうかと思う。

それでこの石棺の内側の人体を葬むる空間は、長さ150㎝、幅50㎝、高さ50㎝内外で、底石はなく、側石の継ぎ目には粘土で目張りが施こされ、棺内には朱が塗られていた。

棺内の遺物は棺のほぼ中央から東の方に残っていたが、棺の東端より西方25㎝の中央より北寄りの所に貝輪1個があり、その西方10㎝の所に鉄片が1塊となってあり、その西方20㎝を距てた北端に頭蓋骨片があり、北側石の根本の東端から10㎝西方に刀子1振、東端から25㎝西方の中心線の南7㎝のところに刀1振が東西に方位して在った。

4. 発掘した遺物

発掘した遺物は次の通りである。

1. 刀　1振

甚だしく腐触しており鞘の木質が腐着している。鍔元から折損して柄部がなく、刀身も先が折損して無く、現長28㎝刀幅中央で3㎝、棟幅0.6㎝を計ることができる。

2. 刀子　1振

総長6.2㎝、うち刃部長さ3.7㎝、柄部の長さ2.5㎝で極めて小さい刀子であるが、刃は鋭利である。刃部の幅．中央

で0.8刃、棟幅0.2㎝で、柄部には木質が残っており厚さ0.7㎝である。

3. 貝輪　1個

折損しているが、約9割を遺存しており、直径6.5㎝のイモ貝製である。

4. 頭蓋骨

写真1に見られるごとくバラバラになっているが眼窩が残っている。

5. 骨片　多数

写真2.に見られるような破片で、黄灰色または褐灰色を呈している。鉄片と見られたのはこの物の1部であったらしい。

5. 遺跡の年代と特徴

この古墳は組合せ式の石棺であるが、扁平な巨石1枚を憲石としている点は、延岡市樫山頂上にあった箱式石棺や高千穂町奥鶴の弥生終末期の組合せ式石棺と同一手法であるが、鉄製の刀や刀子を有し、石棺の身の製作に手が込んでいることなどから時代はかなり降るものと思われるが、前後を通じて、この石棺は古墳時代前期のものと考えられるのである。

しかし、この石棺は、前に述べたごとく、前後（東西）の側石が、南北の側石の崩壊を防ぐため、特に側石の南北両端を10㎝～20㎝だけコ字形に突起させていることが注目されるもので、この様な施設は、県下に未だかって見出だされたことのないもので、この石棺の特徴として高く評価さるべきものと思う

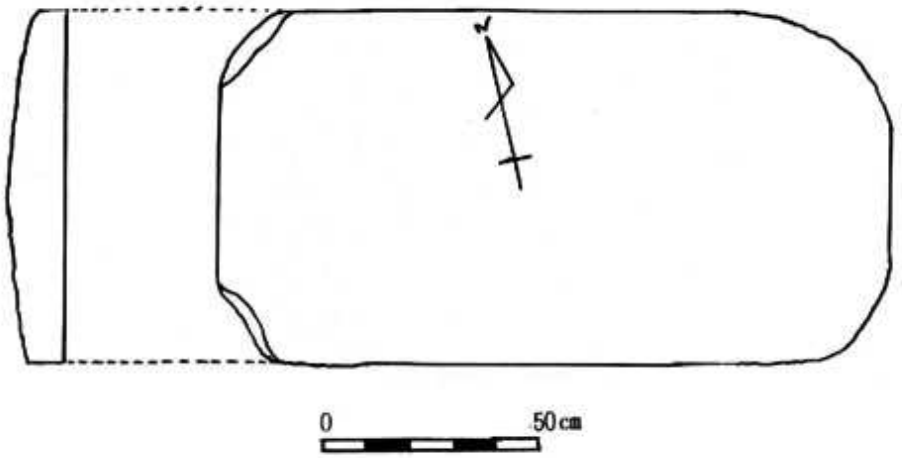
のである。

なお、この石棺は延岡市教育委員会によって内藤記念館に永久保存されることとなったことを付言して置きたい。

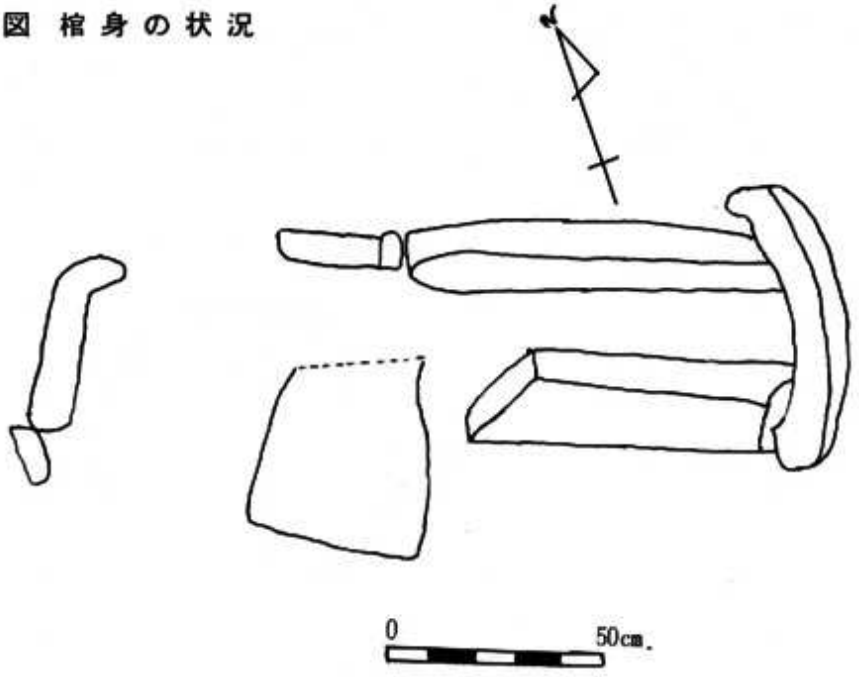
註1. 旭化成工業株式会社延岡支社刊「延岡市樫山古墳群調査報告書」（昭和46年8月）

註2. 石川「西臼杵郡高千穂町奥鶴の箱式石棺調査報告」（宮崎県教育委員会「宮崎県文化財調査報告書」第16集、昭和47年3月。

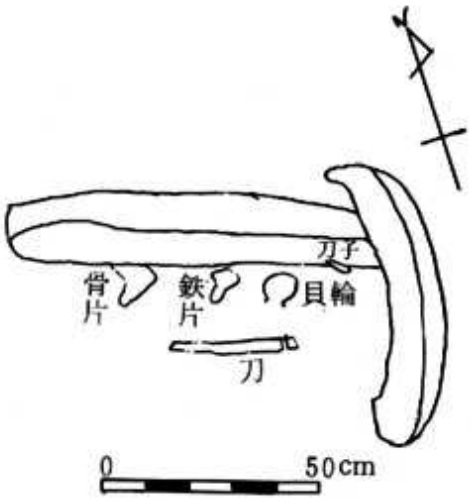
第1図　石棺蓋石



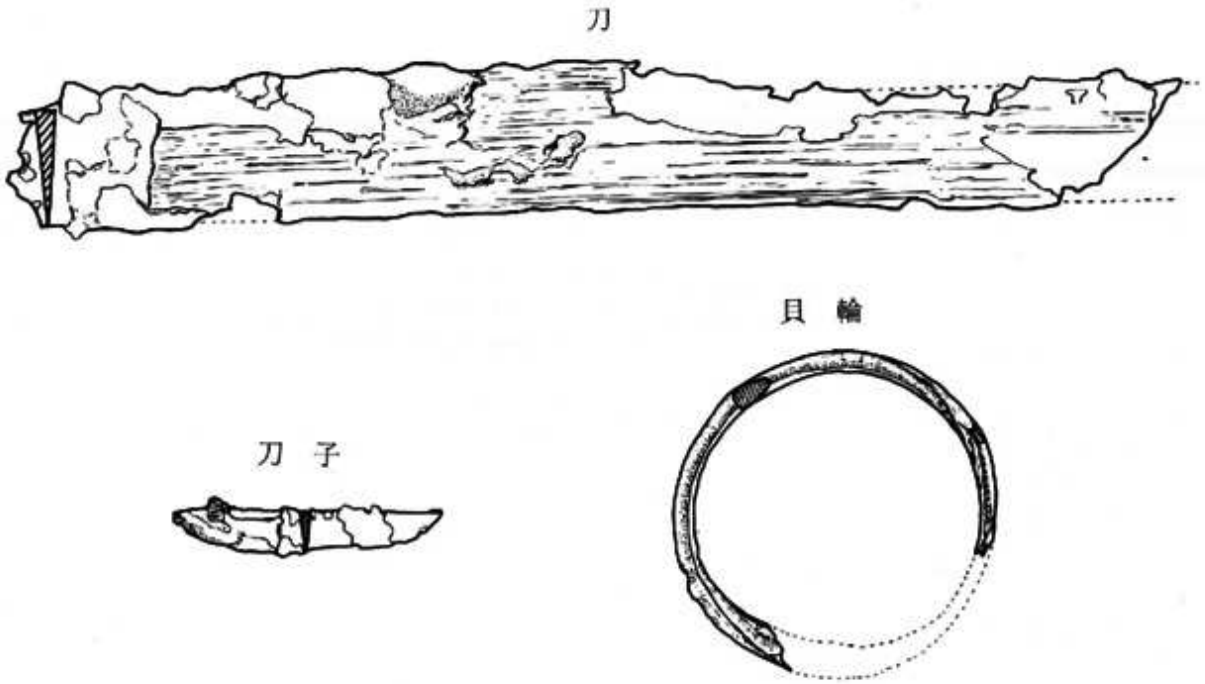
第2図　棺身の状況



第3図　棺内の遺物



第4図　遺物の実側図



延岡市石田町石棺内の遺物

1. 頭蓋骨片

2. 骨　片

3. 刀
小刀子
貝　輪

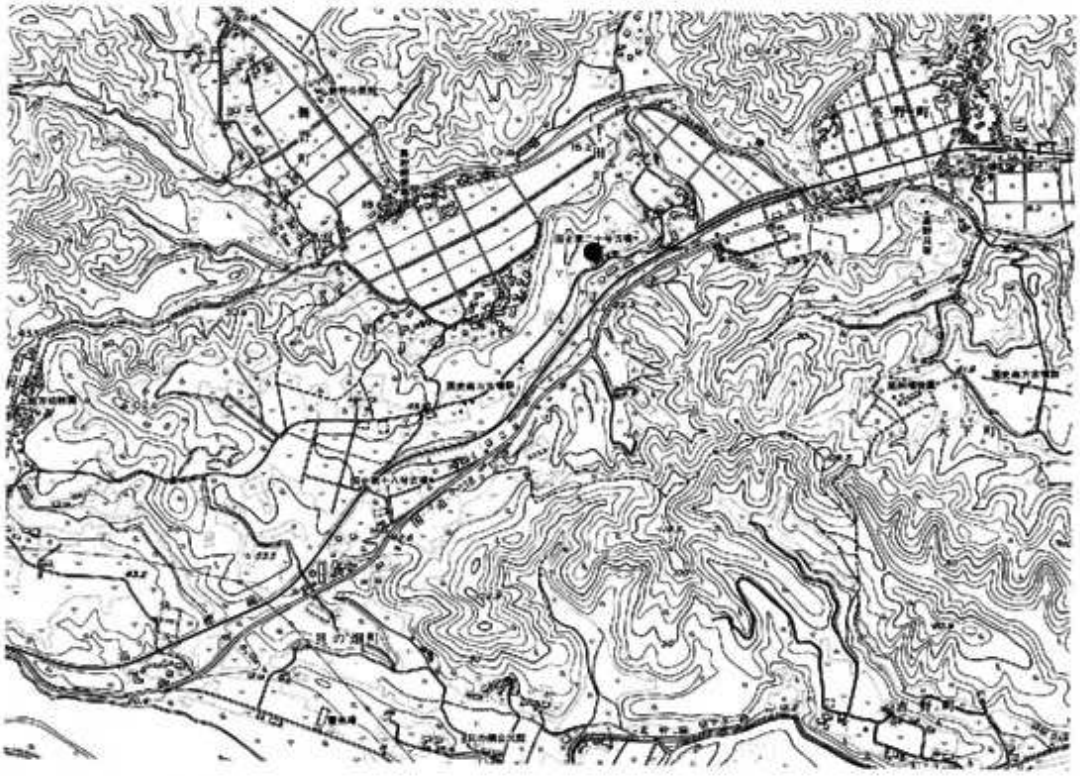
4. 蓋　石

5. 蓋石を除いた状態

6. 石棺内の状態

市道．下舞野線拡幅改良工事に伴う

南方第１９号古墳の墳丘原形確認調査報告



茂　山　　護

はじめに

先に、延岡市教育委員会の依頼を受けて南方19号古墳の墳丘原形確認のための試掘を行なったので、調査結果について概要を報告する。

この調査は、第19号古墳の北側を削り取っている市道．下舞野2号線の拡幅改良工事計画に起因するものである。南方古墳群は、国指定史跡として、52．53年度にかけて保存管理計画が策定されたが、たまたま、19号古墳は施策の遅れた策定対象地域外にあった。付近には、20号、21号、23号古墳もあり、今後の保存管理上からも、道路の改良工事に伴って、直接工事の影響を受ける19号古墳の墳丘原形の確認が緊急に要請されることとなったわけである。

調査は、当初3月10日から11日間の日程で行なわれる予定であったが、諸般の事情で、3月17日から20日までの4日間の試掘調査となった。

調査にあたっては、担当の渡辺博史主事をはじめ、文化財審議員甲斐常美氏、社会教育課課長補佐井上武衛氏に多大のご協力を得た。短期間の調査に拘らず、初期の目的を果すことができたのは、調査に参加した学生諸君の積極的な活動のお陰であった。記して謝意を表したい。

1. 古墳の現状

南方 19号墳は、延岡市舞野町1424 －1にあり、国道218号線北側丘陵地に位置する。

墳丘は円墳で、橋高 50 mの丘陵縁辺に、自然地形を利用して築造されたものである。昭和4年に鳥居竜蔵博士によって発掘調査されており、墳丘内から、南北に長軸をとる長さ2.5 m、高さ1.1 mの、これに長さ1.6 m、幅1.3 m、厚さ 90 cmの天井石をのせた石槨が発見されている。

石組の状態から「原始石槨式」の名称を付し、横穴式石室の原初形態とする見解が述べられているが、すでに盗掘され副葬品もなく、石組もかなり破壊されていた模様で、石槨の詳細については明らかでない。

墳丘については「円墳」と記すだけで、規模についての数値は記載されていない。したがって、現状との対比ができないが、図形の古墳写真をみると、すでに道路の通る北側部分が削られており、現状に近い状態にあったことがうかがえる。（鳥居竜蔵「上代の日向延岡」・昭和10年）

現在、墳丘は東側と北側が削られており、ことに北側は道路で大きく削り取られ、少なくとも墳丘の四分の一を失った状態にある。東側は隣接の栗畑との境界溝で切断されている。

東西径 15 m、南北径 13 mを測る。北側道路切断面の高さ1.8 m、墳丘高は、およそ2 mである。墳丘頂は、東寄りに高く、南西側に若干低くなっている。これは、昭和4年の発掘調査による変形と考えられる。

墳丘北側を削る道路は、平田～上野間を丘陵尾根を真直に結

んでおり、旧高千穂往還といわれている。平田からの登り口途中には、行縢への方位里程を刻む江戸後期の地蔵塔が建っており、往還としてのなごりをとどめている。下舞野線が歴史の道としても貴重なことを示すものである。

19号墳の位置する丘陵上からは、北に行縢山の鞍峰を眺望し、南には、なだらかな貝の畑の丘陵群の起伏をのぞむ景勝の地である。

丘陵上には、19号墳の西方に、国指定南方古墳群に含まれる21号、22号、23号の3基の円墳も現存する。いずれも周囲を削られ原形をとどめるものがないのは残念である。この中には、昭和4年の調査で石棺が発見されたものも含まれる。

このほか周辺からは、組合石棺や古式土師器も出土しており、古墳時代遺跡の包蔵地として注目すべき地域といえる。従ってこの地域における造成工事等の開発行為に対しては、事前の監視体制を強化し、遺跡の破壊消滅を未然に防止することが肝要である。

2. 調査の経過

当初の計画より日程が短縮したこともあり部分的な試掘に終始した。調査は17日に着手し、20日には埋め戻し作業で終了した。4日間の調査計画は次の通りである。

★3月17日(月)雨

午前中は降雨激しく作業困難。午後になってようやく小降りとなり、現地に調査器材収納テント設営。直に墳丘北側畑地に植栽の檜や櫟の移植を行ない調査溝の設定ケ所を定める。

トレンチは、墳丘切断面のほぼ中央部分から北へ向って幅2m、長 10mで設置した。発掘の結果、墳丘から北へ3.5m道路縁より1.2mの地点で地表下 30cmの褐色土層面に周溝とみられる幅1.2mの黒土の陥ちこみのあるのが検出された。

★3月 18日(火)晴

昨日設定したトレンチを1号として、墳丘切断面の両端部分に東を2号として2×6m、西に2×3mの3号トレンチを設定発掘した。2号、3号においても1号と同じく褐色粘度層面に幅1～1.2m前後の陥ち込みを検出し、埋土を掘りあげたところ、いずれも深さ 60～ 80のU字溝となり、墳丘をめぐる周溝となることが確認された。

午後から、東側の境界にも、中央(4号)と南東(5号)部に1.5×2mのトレンチを設定し、それぞれ褐色粘度層面に、周溝を示す黒土の陥ち込みを検出することができた。

★3月 19日(水)晴

第3トレンチに検出された周溝の広がりと西側の墳丘裾確認の為に、第6トレンチを南北に設定した。竹や雑木の切株などで発掘に難渋したが、他のトレンチ同様褐色粘土層面に墳丘をめぐる周溝の掘り込みが観察され、まぎれもなく 19号墳が円墳であることが確認できた。

★3月 20日(金)晴

各トレンチの実測並に写真撮影後、計測の終了したトレンチから埋め戻しによる現状復旧につとめ4日間の試掘を終了した。

3. 各トレンチの所見

第1トレンチ

トレンチ所定に際し、古墳実測図から、墳丘の原形裾は、道路切断部分から3.5ｍ～4ｍ付近に円弧のくることを予測したのであったが、発掘の結果はそれに近い位置に周溝跡を検出することができた。周溝跡は、現在の切断された墳丘裾から3.4～4.5ｍにかけて帯状に東西に通っていた。周溝の掘り込みは現地表下30～38ｍの褐色粘土層面にあり、溝幅は1.2ｍ、深さ 80ｍを計測した。溝底は平坦で溝の断面形はU字形を呈する。

溝から墳丘の立あがり部分の状況については、すっかり削平されており観測はできなかった。溝の外周については、240㎝外側に黄橙色火山性砂質土塊の混在する黒土の層をみるが盛土の一部が削平によって堆積しているもので、特に遺構と認められるものは確認できなかった。従って、第1トレンチでの観察からは、19号墳の墳丘外周施設としては、幅1.2ｍ、深さ 80㎝の周溝のみと判断された。

第2トレンチ

2トレンチでは、南東隅から北へ弧を描く幅 60～70㎝の溝の掘り込みを検出したのは道路下に位置し上部の削平があったのと、後世の塵捨場とおもえる掘り込みが重なっていたこともあり、かなり粘度層面を削りこんでからであった。計測された溝は幅 90㎝、深さ 40㎝であるが、断層面に残された粘土層上部の掘り込み面では、溝幅1.0ｍ、深さ 60

cmを計測することができた。

第3トレンチ

墳丘切断面の西端部に南北に設定する予定であったが、道路西側の地主との間に発掘の了解が得られなかった事もあって、道路部分だけの発掘となった。掘土置場の関係もあり、かなり変則的なトレンチになったが、トレンチの南から北へ対角線状に周溝の掘り込みを検出した。掘り込み面は、路面より 30～35 cm下層の粘土層面にあった。埋土の排除によって確認された周溝は、幅 1.4 m、褐色粘土層上面からの深さは 60 cmであった。溝の側壁は、内にゆるやかで、外壁が急傾斜となっていた。溝底は幅 80 cm前後の平坦の底となっていた。路面から溝底までの深さは 80 cmを超えており、少なくとも、溝底からの墳頂までの高さは2.8 mから3 m近いものになる。

第4．5トレンチ

隣接の栗畑との境界溝となっており上層部はほとんど削平され、トレンチ設定部分ではわずか 20 cm前後で褐色粘土層面に達し、それぞれ南北に通る幅1.2 mの周溝掘りこみ面を検出した。4トレンチでは、トレンチのほぼ中央部に、墳丘切断面からは1.1～2.1 mの位置にある。5トレンチでは、トレンチ西側に接して、境界柱の下にもぐってしまう状態で南北に弧を描いており、掘り込み幅は 80 cmであった。この掘り込みの状況から、墳丘南側の周溝は、現在の境界柱を内壁としてめぐることが予想された。

第6トレンチ

道路から 80 ㎝入りこんだ地点から、トレンチ南端にかけて弧を描く幅 1.2 m の溝の掘りこみ面を検出した。トレンチ南端の断面観察では、薄く平行状に層をなす盛土部分と、比較的厚く層をなす流下堆積層の間に明らかな断層があり、周溝を墳裾とする墳丘の原形を確認することができた。

4. 総　　括

今回の調査は、日程の都合で、検出した遺構の全てを完掘したものでないだけに、若干の問題点が残るが、各トレンチの所見をもとに次の様に総括する。

① 各トレンチの粘土層面に検出された溝遺構は、弧の方向が一致して連結することができ、墳丘を囲む周溝と判断できる。

② この周溝は、溝中の埋土の状況や、一定した粘土層面に検出されていることなどから総合して、後世の境界溝ではなく墳丘築造時の周溝と認められる。

③ 6トレンチ南壁の断面図に示された通り、墳丘の盛り土は周溝の内壁から立ちあがっている。

④ このことから、19号墳築造にあたっては、地山である粘土層に掘りこまれた幅 1～1.2 m、深さ 60～80 ㎝ の周溝を墳丘裾として、この円側に盛土構築されたものと推定される。

⑤ 周溝を基準にして、墳丘の原形を推定すれば、盛土部分の墳丘径はおよそ 17 m、周溝を含む直径はすくなくとも19mを下らない円墳であったものと推定する。

墳丘の高さについては断定できないが、深さ 80 cm前後の溝底からみた墳丘高は 3.0 m前後にあったのではないかとおもわれる。

⑥ 以上の結果から、道路に削り取られた部分は、現在の境界柱より北へ向って最大幅 3 mの円弧部分が削られていることになり、今回の道路拡幅計画部分に、墳丘の原形部分が完全に含まれることになる。

現在、墳丘指定区域を示す境界柱を基準に原形を対比すれば、東側栗畑境界では、境界柱より 1.1 m代側に墳丘裾がくることになる。周溝を含めると少なくとも 2.2 mは外側へ境界柱を移す必要がでてくる。

また、南側では直接試掘していないが、 17 mの推定径からみれば、ほぼ現在の境界柱に重なって墳丘裾が通ることになる。周溝を含めば更に 1 mほど南へ境界柱の移動が必要である。これは、西側でも同様のことがいえる。

今後の保存管理策定にあたっては、こうした点にも配慮されることが望まれる。

以上、今回の試掘調査結果の総括とする。

なお、最後に道路拡幅工事着手に際して、次の措置がとられることを要望したい。

① 墳丘の原状回復が最も望まれるところであるが、困難な情勢にあるので、現在の境界柱から墳頂への切断面に完全な盛土芝張によって最少限度の墳丘保護をはかる。

② 拡幅部分に含まれる周溝未調査部分の全面発掘を実施する。場合によっては祭祀遺構の存在も予想される。

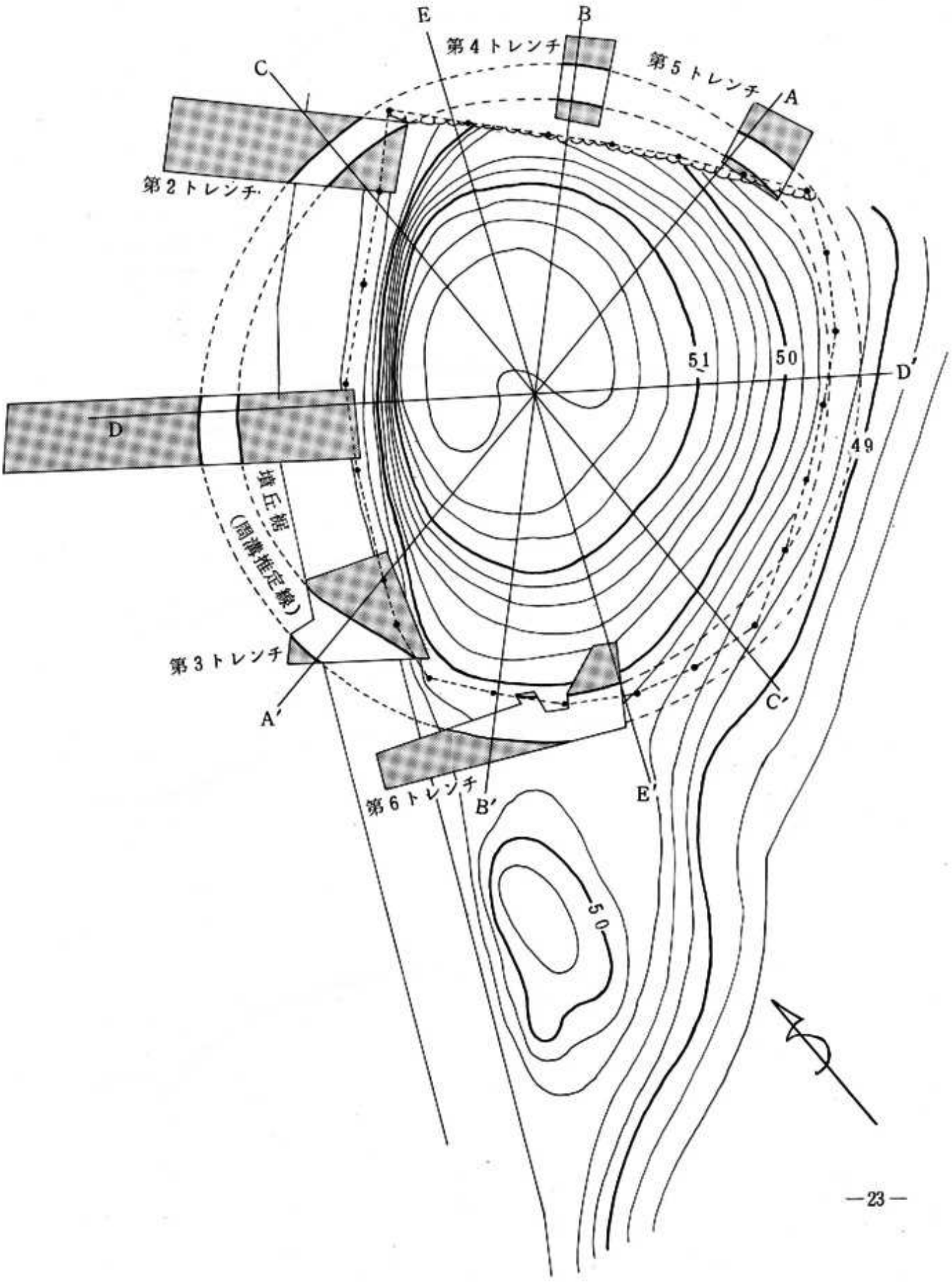
③　古墳西側にある楕円状の盛り上り部分の切り取り時には、社会教育課担当者の立合いを求め確認を行なう。

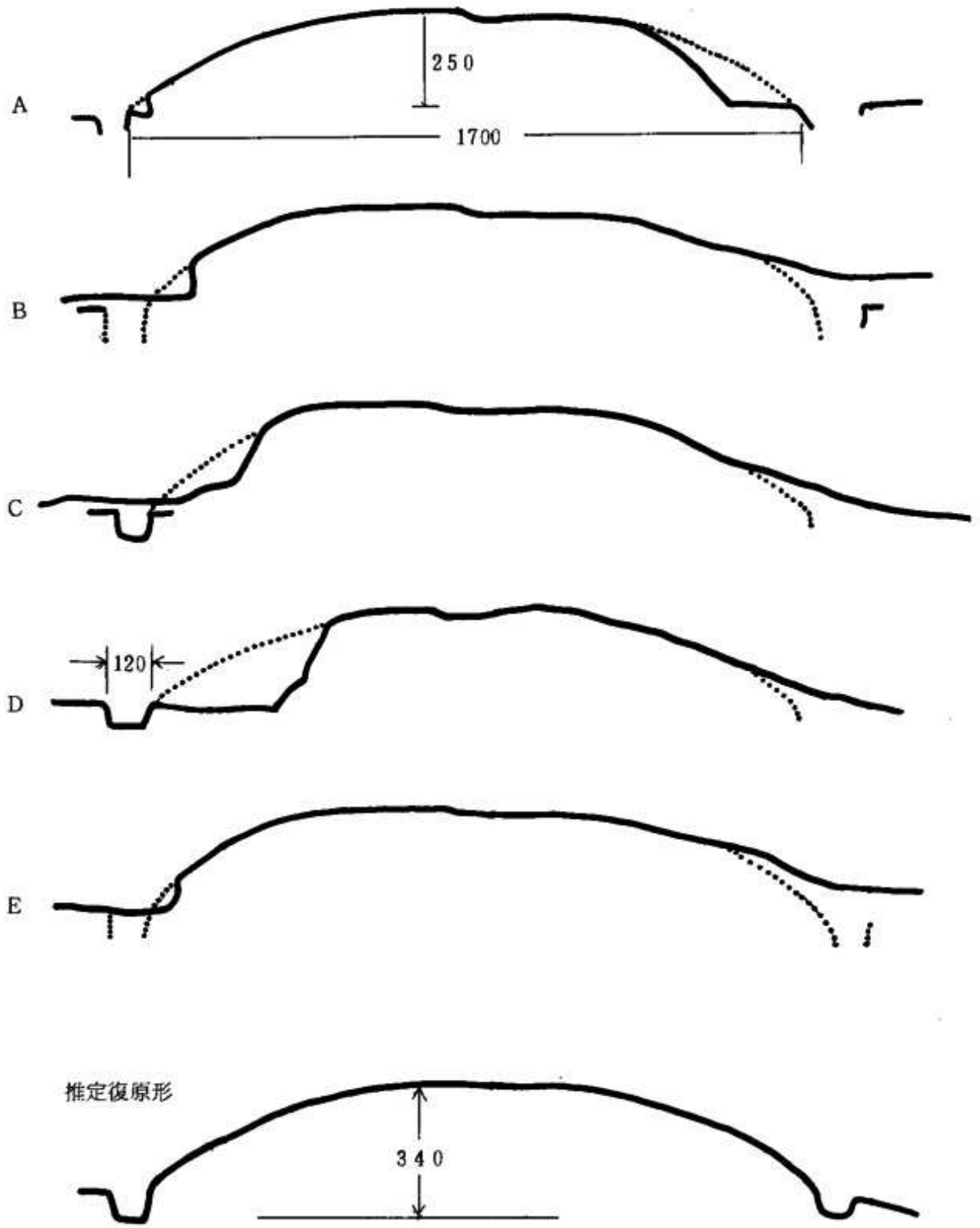
今回の調査で、自然丘としての確認がなされていないだけにぜひ懸案をお願いしたい。

調査にあたり、便宜を与えられた延岡市教育委員会当局に対し深甚の謝意を表したい。

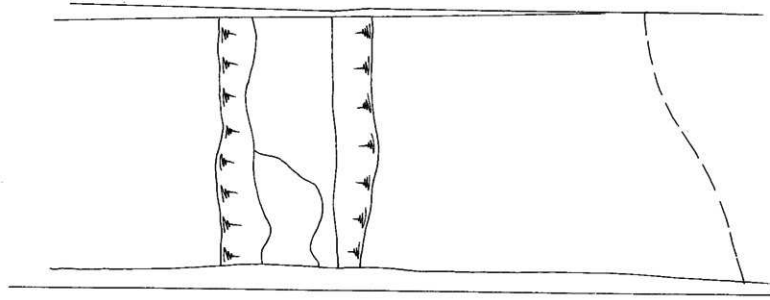
55. 4. 3.

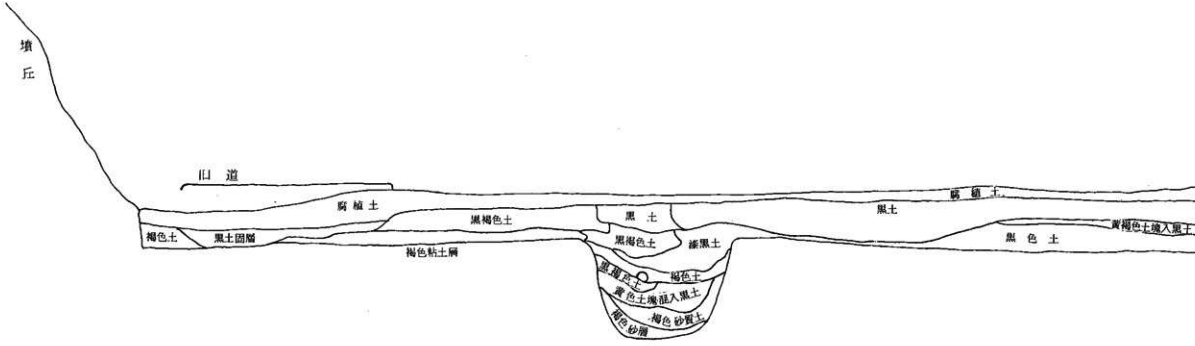
延岡市下舞野　南方古墳群１９号墳　　１：１００



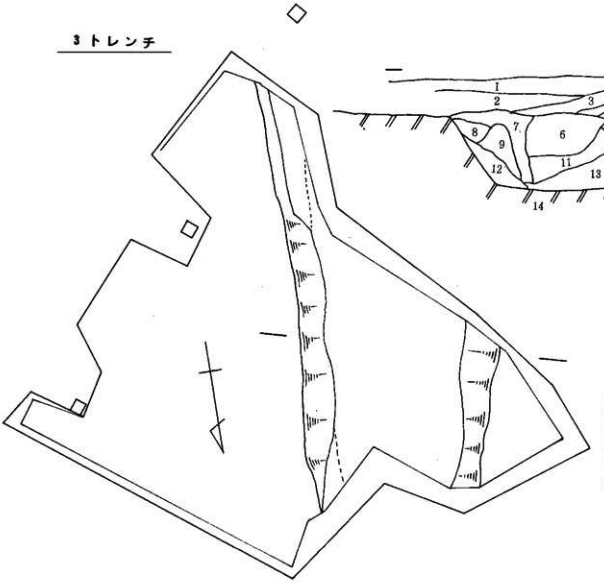

A
250
1700
B
C
D
120
E
推定復原形
340

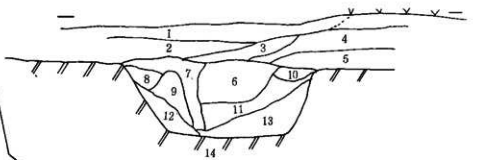
1トレンチ




墳丘
旧道
腐植土
黒褐色土
黒土
黒土
褐色土
黒土固層
褐色粘土層
黒褐色土
縁黒土
褐色土
黄色土混入黒土
褐色砂質土
褐色砂層
褐色土
黄褐色土混入黒土
黒色土

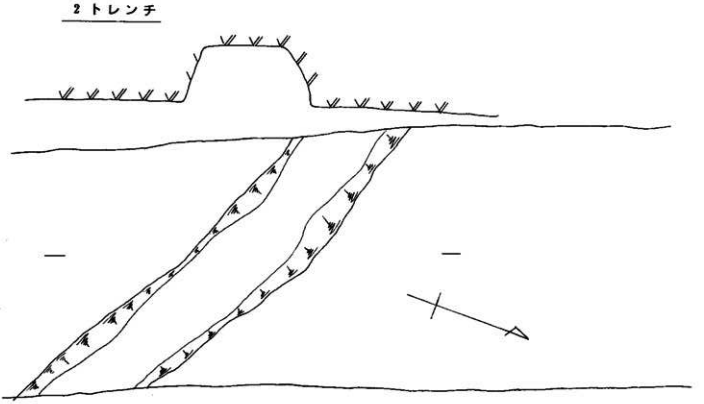
3トレンチ





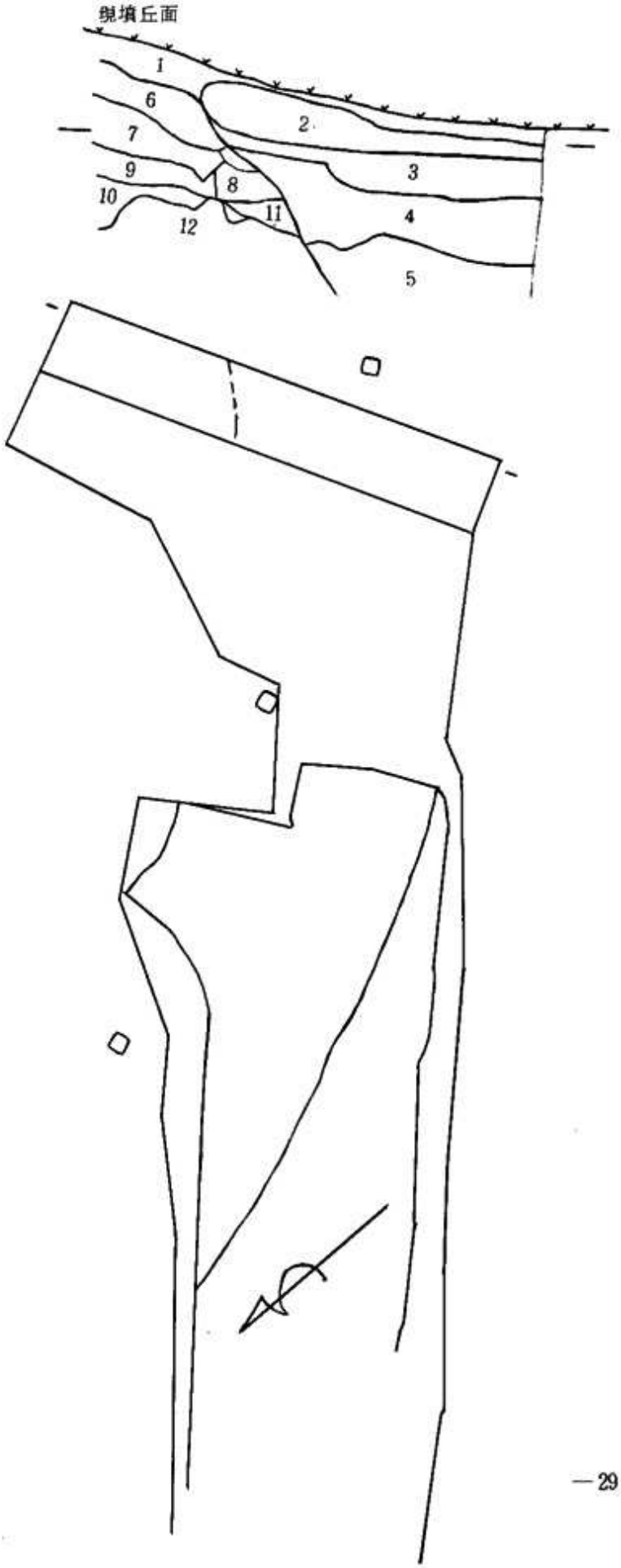
1. 黒褐色固緊土（旧道面）
2. 黒褐色粘質土
3. 黒褐色砂質土
4. 褐　色　土
5. 黒 褐 色 土
6. 黒　色　土
7. 黒　色　土
8. 黒　色　土
9. 褐 色 砂 質 土
10. 粘　土　塊
11. 黄橙色土塊混入褐色土
12. 黄橙色土塊混入黒土
13. 粘土塊混入砂質土
14. 粘　土　層

2トレンチ



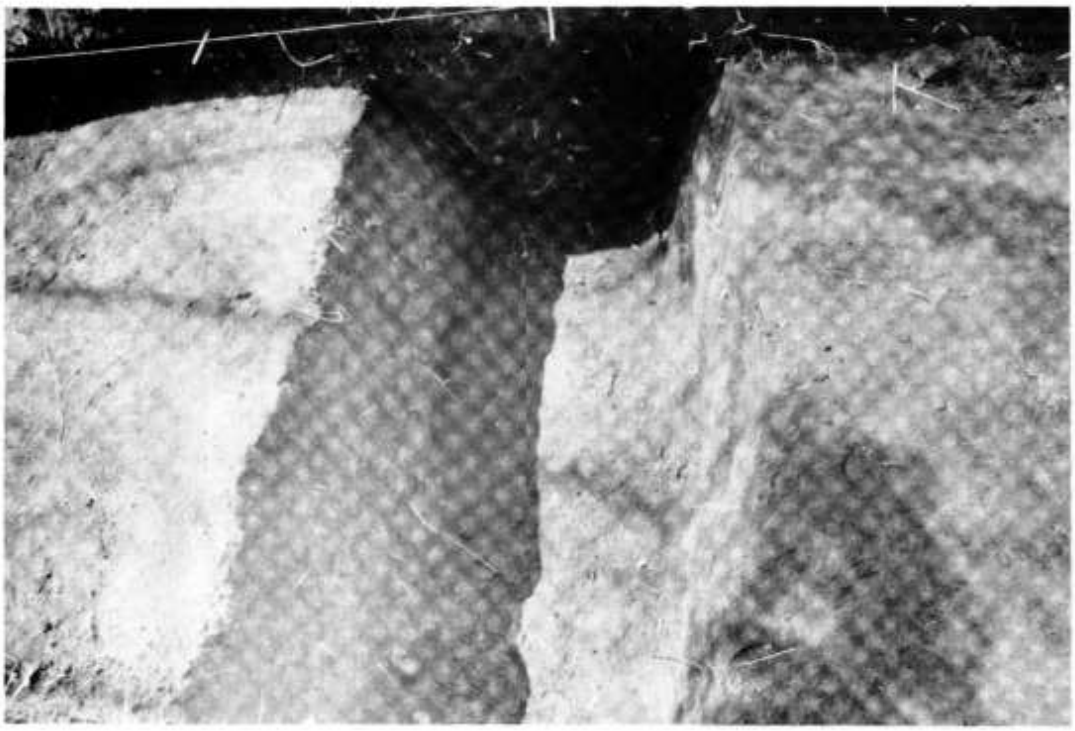
6 トレンチ

1. 腐　植　土
2. 赤橙色固堅土
3. 黒　　土
4. 赤褐色砂質土
5. 褐色砂質土
6. 黒　色　土
7. 褐　色　土
8. 黒褐色砂質土
9. 黒 褐 色 土
10. 褐　色　土
11. 褐色砂質土
12. 黄褐色粘土層

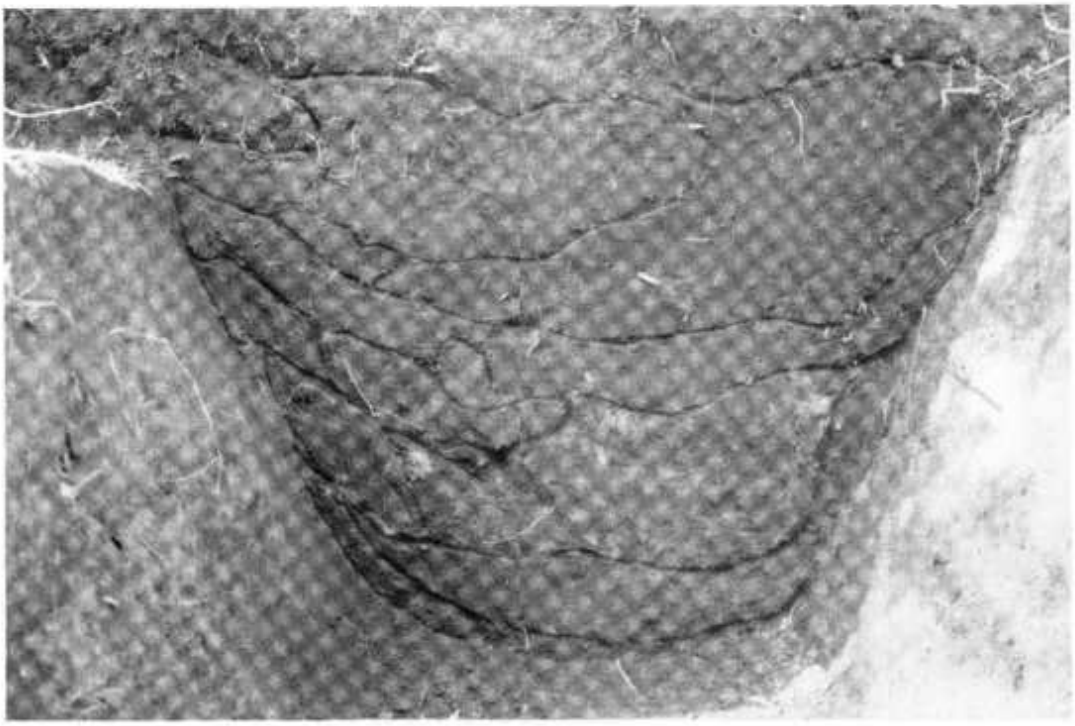


南方１９号古墳　東側からの景観

墳丘をめぐる周溝跡　第1.第3トレンチの景観



第1トレンチ　検出の周溝跡



周溝断面の堆積状況

延岡市文化財調査報告書 Ⅰ

発 行　1981年3月31日
延岡市教育委員会

編 集　延岡市教育委員会
社 会 教 育 課